

レポートカード・シリーズにおいて、データの提供、解説の執筆などでご協力をいただいている、東京都立大学 人文社会学部教授 兼 子ども・若者貧困研究センター長の阿部彩教授からも文書でコメントをいただきましたのでご紹介します。



阿部彩 氏（東京都立大学 人文社会学部教授 兼 子ども・若者貧困研究センター長）

今回のRC16にて、最も注目を集めるのは、日本の子どもの「精神的幸福度」のランキングの低さでしょう。38カ国中、ワースト2位ということで、とても悲しい結果となりました。これについて、尾木直樹先生は、競争原理による一斉主義や、いじめの問題を指摘なさっており、私も同じ懸念をもっています。しかし、子どもの貧困を長年研究してきた者として、子どもの精神的幸福度や、いじめに遭う確率も、子どもの経済状況に左右されているということを指摘させていただきたいと思います。

確かに、各国の平均を比べる国際比較において、日本の子どもの「生活に満足している」と答えた割合は低い傾向にあります。しかし、日本の中でも、子どもの精神的幸福度には差があります。東京都が2016年に行った「子どもの生活実態調査」によると、中学2年生において、「楽しみにしていることがたくさんある」「生きていても仕方がないと思う」「何をしても楽しい」など答えた割合は、家庭の経済状況によって格差があることが報告されています。また、いじめに遭う確率も、経済状況と関係していることがわかってきました。

本レポートの二つ前のインテント・レポートカード14では、「格差」についてのランキングも示されていますが、日本は41カ国中32位と、決して誇れる順位ではありませんでした。先進諸国の中で、日本は国内での格差が大きい国のひとつであることを改めて認識し、今回の結果を見ていただきたいと思います。

また、「スキル」の分野にても、日本は27位であり、この理由は「スキル」の2つの指標のうち1つ、「すぐに友達ができる」という設問に「まったくその通りだ」または「その通りだ」と答えた生徒の割合がワースト2位だったからです。もう1つの「スキル」指標の数学・読解力は上位5位なのですが、総合すると「スキル」が低い国ということになります。ユニセフが、本レポートで、「スキル」として、学力だけでなく、社会的スキルを今回指標として取り入れたことは重要です。人が幸福な人生を歩むためには、学力のみならず、社会的スキルが重要であることが認識されてきたからです。

これは、社交的で、たくさんの友人にいつも囲まれていない子どもが悪いということではありません。人によっては、シャイであったり、一人でいるのが好きな子もいるでしょう。しかし、どのような性格の子どもであっても、周りから偏見の目で見られることがなく、友だちをつくらうと思ったら、すぐできる、という環境があるのか、ないのか、それが問われていると思います。

本レポートでは、子ども幸福度の条件として、「政策」と「社会状況」にも着目しています。この中でも、日本のさまざまな問題が浮き彫りにされています。「政策」の社会分野においては、親のワーク・ライフ・バランスの重要性が指摘され、指標としては、「母親・父親に認められる育児休業の週数合計」が提示されています。日本は上から5番目ですが、多くの方がご存じのように父親の育児休業取得率はやっとなら6%（平成30年度）です(1)。つまり、「認められる」育児休業週数は多くても、実際に「取得」されているものはごく僅かです。また、家族関連の社会支出のGDP比も日本は下から8番目でした。日本は、社会政策分野において子どもが幸福となる土台を作ってきていないのです。

さらに、教育分野として挙げられているものに、就学1年前の保育所・幼稚園などの通所率があります。これは、日本は優等生と思っている方も多いかと思いますが、下から7番目でした。健康分野においても、低出生体重児（2500グラム未満）の割合が、下から2番目でした。

「社会状況」については、殺人による死亡率が最も低い、失業率が低いなどのよい結果もありますが、「困った時に頼れる人がいる」と答えた成人の割合は、下から10番目でした。このように、成績の良い指標と悪い指標が混ざっている日本の状況を「パラドックス」とグロマガ氏は呼んでいます。これは日本において不利の現れ方が他国と違うということではないでしょうか。失業率は低くても、ワーキングプア（低賃金）の問題が深刻であり、殺人率は低くても、自殺率はトップレベルというように(2)。

日本の子どもの幸福度を上げるために、必要なのは、最も幸福度が低い状況に置かれている格差の底辺にいる子どもたちとその家族の状況を改善することです。いじめに遭いやすい貧困世帯の子どもや、ワーク・ライフ・バランスなど考えることもできない非正規労働の保護者、子どもを保育所に預けることもできない家庭。一番底辺の人々の状況を改善し、格差を縮小することで、「すぐに友達ができる」子ども、困って時に頼れる人がいる大人、そして、生活に満足する子ども・大人が増えるのではないのでしょうか。

(1) <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/meeting/consortium/04/pdf/houkoku-2.pdf> (2) 人口10万人あたり自殺者数、WHO2016年